The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語「のだ」とアラビア語 ’inna
Author(s)	仲尾, 周一郎
Citation	外国語教育のフロンティア. 2022, 5, p. 85-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87569
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論　文

日本語「のだ」とアラビア語 *ʾinna*

Japanese *noda* and Arabic *ʾinna*

仲尾　周一郎

Abstract

In the conventional Arabic education (in the West and in Japan), the sentence-initial particle *ʾinna* has been introduced as a semantic equivalent of the English adverb 'truly', 'indeed', etc. or the corresponding adverbs in Japanese, *makotoni*, *zituni*, *geni*, etc., which 'are, however, not necessarily translated'(Honda & Ishiguro 1997). This type of explanation based on the 'Grammar-Translation Method' will not enhance the students' comprehension of this frequently occurring grammatical item.

This study sheds light on the structural and functional parallelisms of *ʾinna* and Japanese *noda* (e.g., Tanomura 1990; Noda 1997), which has been studied in contrast with parallel constructions in many languages, e.g., Korean *kesita*, Chinese *shi de*, Mongolian *yum/mön*, Spanish *es que*, French *c'est que*, English *it is that*, etc.

This study argues *ʾinna* as a marker of (contrastive) sentence-cum-argument focus, but not a topicalizer as many other studies/textbooks have claimed, and reassesses the traditional label for the modal value of *ʾinna* given by the medieval grammarians, *tawkīd* 'assertion, confirmation' (traditionally translated 'emphasis'). By examining parallel translations (mainly *Le petit prince* and the New Testament, i.e., texts translated from the third language to both Arabic and Japanese), this study identifies four functions shared by *noda* and *ʾinna* ('explanation', 'prehension', 'disclosure' and 'demonstration'), one only attested with *noda* ('hortation') and one only attested with *ʾinna* ('spontaneous (re)action/direct indication').

In addition, some remarks are made on the rather contrastive distribution of *noda* vs. *ʾinna* within the discourse and registers, as well as the cross-linguistic nature of the formal, functional and etymological continuity of the focus and presentative constructions.

キーワード：のだ、焦点、モダリティ、対照研究

1. はじめに[1]

名詞文や名詞節化と構造的・語源的なつながりをもつ標識が文の周縁部に現れ、新情報として確固たる事実を提示するようなモダリティを表す構文といえば、何だろうか。答えとしては日本語のいわゆる「のだ」文が容易に想起されるだろう。そして「のだ」と形式的・意味的に似た構文は、朝鮮語 *kesita*、中国語「（…是）…的」、モンゴル語 *yum/mön*、口語ビルマ語 *=tà/=dà/=hmà*、ハウサ語 *nē/cē, kè nan*、スペイン語 *es que*、フランス語 *c'est que*、英語 *it is that* ほか多くの言語で指摘されている（小沢 1978; 杉村 1982; 福嶌 1994; 野田 1997; 加藤 1998; 大竹 2009; 塩田 2010; 千田＆金 2018）。エジプト語でも各時代に「のだ」と似た機能を併せもつ構文が存在したようである（小山 2013）。

さて、アラビア語に *ʾinna* という小辞がある。これまで、ほとんどのアラビア語教材では「実に、げに、まことに、まさに」（英語なら 'verily, truly, certainly, indeed'）などの訳語が与えられつつ、往々にして「特に訳す必要はない」（本田・石黒 1997: 45）、"in most cases not translated in English"（Arts 2014: 36）と説明されてきた。こうした「文法訳読法」の枠組みによる説明では、*ʾinna* の正確な理解は不可能である[2]。

ところで *ʾinna* は名詞節／補文標識としての機能を併せもち（2.2 節参照）、主節初頭に現れ、対比的な「文焦点」（sentence focus）ないし「命題内容が真であることを確証する」（*tuʾakkidu maḍmūna l=jumlati*）ようなモダリティを表すと言われる（Moutaouakil 1984: 131; Ouhalla 1997）。Moutaouakil（1984: 131）は *ʾinna* が (1) のような応答文（典型的な文焦点の文脈）に現れうることを述べているが、日本語「のだ」も同じ環境に現れうる。実際、日本語によるアラビア語教材でも、(2) のように *ʾinna* が「のだ」と対応しているように見える例がみられる（ただし (2a) では「実に」が補われている）。

(1) Q. *mā l=xabaru?*　「どうしたんですか（ニュースは何ですか）」
what DEF=news
A. ***ʾinna*** *ʿamran musāfirun.*　「アムルが旅立つ<u>んです</u>」
INNA Amr travel.PTCP

(2) a. ***ʾinna****=ka ta-ḍribu fī ḥadīdin bāridin.*
INNA=2SG.M 2SG.M-hit at iron cold
「実に，貴男は冷たい鉄を打っている<u>のです</u>よ
（鉄は熱いうちに打つのが常識なのに）」（ことわざ；内記 1989: 83）
b. *ʾalyawma ʾu-rīdu ʾan ta-kūna risā[l]at=ī qaṣīratan.*
today 1SG-want COMP 3SG.F-be letter(F)=1SG short
ʾinna*=hā lā yumkinu ʾan ta-kūna ġayra ḏālika*
INNA=3SG.F NEG it.is.possible COMP 3SG.F-be other.than that
li=ʾanna=nī ʾa-šʿuru bi=ki dāxil=ī bi=quwwatin.
for=COMP=1SG 1SG-feel with=2SG.F inside=1SG with=power
「今日の私の手紙は短いものにしよう。何故なら，私は自分のうちで君を強く感じとっているから，短いものにするより他にしようがない<u>のだ</u>。」
（ラアビー「監獄の手紙」；奴田原 1995: 126-127）

さらに、(3a) 中国語でのアラビア語語義記述でも、「のだ」との対応が指摘されている「(…是) …的」構文が現れていることがある（ただし逐語訳としては「確」（「確かに」）が充てられている）。また、同様に「のだ」との対応が指摘されるフランス語 *c'est que* がアラビア語で *ʾinna* と訳されている例 (3b) も見られる。

(3) a. ***ʾinna*** *l=ʿilma nāfiʿun.* 「科学確是有用的」（陳 1988: 322）
INNA DEF=science useful （筆者訳：「科学は有用（なの）である」）

b. *wa=bi=hāḏā ʾuṯliʿ-tu ʿalā ʾamrin ṯānin bāliġu l=ʾahammiyyati:*
and=with=this was.notified-1SG on matter second extreme DEF=importance
ʾinna *kawkaba=hu bilkādi ʾakbaru min baytin!*
INNA planet=3SG.M barely larger than house
"J'avais ainsi appris une seconde chose très importante: **C'est que** sa planète d'origine était à peines plus grande qu'une maison!"（*Le petit prince* 4 章、ʿAmmārī 訳と原文）
「これによって私は二つめのとても大事なことに気付かされた：彼の出身の星は何とか家より大きいくらい（なの）だ！」（ʿAmmārī 訳からの筆者訳）

このように、*ʾinna* は「のだ」文ほかと形式的類似性や並行的なあらわれをもつといえそうだが、この事実は筆者の知る限りこれまで指摘されていない。

本稿は、*ʾinna* について日本語を含む通言語的視点から記述するための準備を目的とする。2 節ではその形態統語構造・情報構造・言語変化などを先行研究をもとに整理する。3 節では「のだ」との機能や分布の類似点・相違点を明らかにする。最後に日本語・アラビア語対照言語学、および「のだ」の類型論的研究の可能性について指摘する。

2. *ʾinna* の形態統語構造・情報構造・語源と言語変化

2.1 *ʾinna* の形態統語構造

ʾinna 自体は不変化詞だが、その文の形態統語構造に影響を与える。アラビア語では、デフォルト語順 (4a) の場合には主格（NOM）・対格（ACC）が文法関係（それぞれ主語・目的語）を標示するが、主題化文 (4b, c) では動詞の前に現れる名詞句（主語・目的語）は主格、*ʾinna* によって導入される文 (4d) では主語・動詞語順となり、主語は対格で標示される（以下 (4)・(5) は作例）[3]。

(4) a. *ḍarab-a zayd-**un** xālid-**an**.* 「ザイドがハーリドを打った」
hit-3SG.M Zayd-**NOM** Khalid-**ACC** （V＋S＋O）

b. *zayd-**un** ḍarab-a xālid-an.* 「ザイドはハーリドを打った」
Zayd-**NOM** hit-3SG.M Khalid-ACC （S＋V＋O）

c. *xālid-**un** ḍarab-a=hu zayd-un.* 「ハーリドはザイドが打った」
Khalid-**NOM** hit-3SG.M=3SG.M Zayd-NOM （O＋V (=O) ＋S）

d. ***ʾinna*** *zayd-**an** ḍarab-a xālid-an.* 「ザイドがハーリドを打った（のだ）」
INNA Zayd-**ACC** hit-3SG.M Khalid-ACC （*ʾinna*＋S＋V＋O）

アラビア語は動詞を欠く名詞・形容詞述語文 (5a) と主語が場所句に後置される存在文 (5b) をもつが、*ʾinna* がつく場合、単純に主語のみが対格となる（存在文の語順は変わらない）。なお、(4b, c)・(5a, b) のような、つまり動詞はじまりでない全ての文タイプは、アラビア語研究で伝統的に「名詞文」（*jumlatun ʾismiyyatun*）と総称される。

(5) a. *zayd-**un*** *marīḍ-un.* 「ザイドは病気だ」
Zayd-**NOM** sick-NOM
b. *fī d=dāri rajul-**un**.* 「家に男がいる」
in DEF=house man-**NOM**
a'. ***ʾinna** zayd-**an** marīḍ-un.* 「ザイドは病気（なの）だ」
b'. ***ʾinna** fī d=dāri rajul-**an**.* 「家に男がいる（のだ）」

本稿では詳述しないが、(4d) の動詞、(5a') の述語名詞／形容詞、(5b') の対格主語には、それ自体も「強調」とラベリングされる前接語 *la=*（gloss: 'LA'）がつきうる。

ʾinna は（接続副詞などを除き）ほぼ必ず主節初頭に現れるが、(6) のように語順ないし主題化標識 *ʾammā ... fa=* で主題化が行われる場合、主題の直後から *ʾinna* 文がはじまる（主題は太字の再述代名詞で示される；これ以降、格のグロスは省略する）。

(6) a. *zaydun, **ʾinna** ʾabā=**hu** marīḍun.*
Zayd **INNA** father=**3SG.M** sick
「ザイドは、父が病気（なの）だ。」（Moutaouakil 1984: 132）
b. *ʾammā l=maraḍu l=laʿīnu fa=**ʾinna=hu** lā ya-rḥamu.*
TOP DEF=illness DEF=cursed then=**INNA=3SG.M** NEG 3SG.M-have.mercy
「その呪われた病は容赦しない（のだ）」（Buckley 2004: 668）

この他、(7) のように *ʾinna* に形式主語代名詞ないし後方照応的な人称代名詞（太字）が後続し、述語の後に倒置された主語（太字）があらわれる場合もある[4]。

(7) a. *fa=**ʾinna=hu** mina ḍ=ḍarūriyyi **ʾinšāʾu=hu***
then=**INNA=3SG.M** from DEF=necessary **establishment(NOM)=3SG.M**
「そこで、その設立が必要（なの）である」（佐藤 2003: 109；訳は筆者が改変）
b. ***ʾinna=hu** la=makānun sirriyyun tamāman, **ʾarḍu** **d=dumūʿi**.*
INNA=3SG.M LA=place secret completely **land(NOM)** **DEF=tears**
「ほんとうに謎の場所なんだ、涙の国というやつは。」
（*Le petit prince* 7 章、上から Yūsuf 訳、管訳）

加えて *ʾinna* の重要な構造的特徴として、平叙文が基本的である点が挙げられる。日本語の「のだろう、のだった」のような非現在時制、「のではない」に対応する *ʾinna* 自体の否定、疑問詞疑問文（「何を…のか」など）は筆者の知る限り在証されない。諾否疑問文や付加疑問文での使用は古典期以前に見られるが、現代では稀である[5]。

(8) a. ***ʾa=ʾinna*** *la=nā* *la=ʾajran* 「我々に報いがあるのか？」
Q=INNA for=1PL LA=reward （コーラン 26 章 41 節、Reckendorf 1921: 128）
b. ***ʾa=lā*** ***ʾinna*** *l=ʾinsāna* *min* *turābin*
Q=NEG **INNA** DEF=human from dust
「実に人間は土から（作られたの）ではないか。」（内記 1989: 84 の訳）

これらのほか、少なくとも古典期以前には付帯状況節や関係節内での使用が在証される（Howell 2003, vol. 5: 392-416）のに対し、日本語「のだ」は連体形や付帯状況節（「…ながら」など）での現れをもたない点は特筆に値する。一方で「のだ」とは異なり、理由節（cf.「のだから」）・譲歩節（cf.「のだが」）や時間節には *ʾinna* は現れず、むしろそれらの統語的なホストとなる主節が *ʾinna* で標示される傾向がある（2.3 節参照）。条件節については在証されないわけではないが（註 10 参照）、稀であり、日本語「のなら」とは違って条件文全体が焦点範囲となるようである。

2.2 《主題》標識としての記述とその問題、*ʾinna* の焦点範囲

さて、アラビア語教材では、(4d) で見られる有標な語順に着目し、*ʾinna* が直後の名詞句を「強調／主題化／焦点化／ハイライトする」、または「取り立てる」機能をもつという説明が目立つ。このタイプの説明では、(4b, c) のような例から、動詞前スロットを素朴に《主題スロット》と仮定した上で、「*ʾinna* は主題化スロットに主語名詞句を移動させ（「名詞文」化する）、主題化の機能をもっている」のように形式と機能が無根拠に同一視されているようである[6]。

やや実証的な指摘として、Fakhri（1995: 152-153）や Dahlgren（1998: 212-217）が *ʾinna* に後続するのはほとんど限定名詞句である（一般に《主題》の典型的とされる特徴の一つ）、その名詞句が後方文脈で指示されやすい、*ʾinna* 文が段落初頭に現れやすい、などの観察から *ʾinna* が《主題》を表す機能をもつと論じている。これらの観察は重要だが、推論的には後件肯定を行っているに過ぎず、(5b’) や (6)・(7) のように *ʾinna* が明らかに主題とは呼べない代名詞をとる構文によって容易に反証される[7]。また、両研究が分析しているのは主に談話主題だが、文主題と峻別されておらず混乱を招きかねない[8]。これらの理由から、*ʾinna* が《主題》を表すという説明は支持できない[9]。

似て非なる記述として、Reckendorf（1921: 127）は *ʾinna* の主機能は主語の強調ではなく、むしろ「文中でそれについて新しく重要なことが付け加えられる」（„über die etwas Neues und Wichtiges erst jetzt hinzugefügt wird“）ような既知の主語を提示し、従って「[主語] ではない部分こそが強調される」（„der Schwergewicht gerade auf diesem anderen Teile des Satzes liegt“）、という逆転的な発想を提示している。

冒頭で述べたように、*ʾinna* は文全体を焦点化できるため、Reckendorf の説明をそのまま受け入れることはできないが、（「のだ」がそうであるのと同様に）*ʾinna* は必ず文全体を焦点化するわけでもない。恐らく無制限ではないが、(9) のように、特に情報構造に関する標示をもたないが文の一部のみが対比焦点（{}で示す）である文にも、*ʾinna* はあらわれうる。*ʾinna* に非主語（太字の再述代名詞で示されている）が主題化された文 (10a, b)[10] や、*ʾinna* に分裂文（主語が焦点化）が後続している例 (10c) もみられる。

(9) ＜わしたち地理学者は花など地図に記録しない、というのも…＞
*ʾ**inna**=nā nu-dawwinu {l=ʾašyāʾa l=ʾabadiyyata}.*
INNA=1PL 1PL-record DEF=things DEF=eternal
「わしたちは，{いつまでもかわらないこと}[を]かくんだよ」
（*Le petit prince* 15 章、Yūsuf 訳、内藤訳）

(10) a. *fa=ʾ**inna** baʿḍan mina l=masājidi tamm-a bināʾu=**hā*** [...]
then=**INNA** some of DEF=mosques(SG.F) completed-3SG.M building=**3SG.F**
「そしてモスクのいくつかは […] その建設が行われた」（佐藤 2008: 108 の訳）
b. *ʾ**inna** kulla kalimatin baṭṭālatin ya-takallamu bi=hā n=nāsu*
INNA every word(.F) worthless 3M-speak with=3SG.F DEF=people
*sawfa yu-ʿṭ-ūna ʿan=**hā** ḥisāban yawma d=dīni.*
FUT 3PL.M-are.given-3PL.M about=**3SG.F** account day DEF=judgment
「人は自分の話したつまらない言葉についてもすべて、裁きの日には責任を問われる。」（マタイ書 12 章 36 節、New Van Dick 訳、聖書協会共同訳）
c. *fa=ʾ**inna** hāḏā llaḏī kutib-a ʿan=**hu:*** [...]
then=**INNA** this REL was.written-3SG.M about=**3SG.M**
「[…] と書いてあるのは、この人のことだ。」
（マタイ書 11 章 10 節、New Van Dick 訳、聖書協会共同訳）

現時点では、*ʾinna* は、実際そうであることが多いにしても、必ずしも「文焦点」をあらわすのではなく（cf. Moutaouakil 1984）、後続する文全体ないしその要素を焦点化する、という捉え方が妥当であろう。1 文での情報構造を表す装置の重複を避けるためか、(10) のような構造は稀だが、今後広く実例を収集して検討される必要がある。

2.3 《文頭の *ʾinna*》と《非文頭の *(fa=)ʾinna*》を分ける記述とその問題点

近年のアラビア語教材には、*ʾinna* を《文頭の *ʾinna*》と《非文頭の *fa=ʾinna*》に分けて記述しているものがある。*fa=* ‘then’ は前後の節・句を論理的に関係づける等位接続詞／接続副詞だといえる（cf. 3.1.1 節）。例えば Arts（2014: 36）は *fa=ʾinna* を見出し語 *ʾinna* の下位項目として別立てにし、*li=ḏālika fa=ʾinna* ...「それゆえに…」、*fī l=wāqiʿi fa=ʾinna* ...「実際には…」の例文を挙げている。Brustad et al.（2006: 76, 119）は *ʾinna* が現れやすい構文として、逆接を表す *maʿa ʾanna/bi=r=raġmi min ... fa=ʾinna* ...「…にも関わらず…」や *wa=fawqa hāḏā kulli=hi fa=ʾinna* ...「これら全てに加え、…」を挙げている。2.1 節で挙げた *ʾammā ... fa=ʾinna ...* の例もこれらに加えられそうである。

より詳細な説明としては、Dickins & Watson（1998: 260-261, 419-428）が、文頭に現れて「強調」を表す *ʾinna*（‘emphatic usage’）と副詞句・副詞節に続く主節を導入する *fa=ʾinna*（‘resumptive particle’）を分けている。後者の例として、*wa=hākaḏā fa=ʾinna*「このように、…」のような副詞句に続く主節や、条件・譲歩文の帰結節が *fa=ʾinna* で標示されている例を挙げている。

(11) *wa=l=mustašīru waʾin kān-a ʾafḍalu raʾyan mina l=mušīri,*
and=DEF=advisee even.if was-3SG.M better opinion than DEF=advisor
***fa=ʾinna**=hu ya-zdādu bi=raʾyi=hi raʾyan*
then=INNA=3SG.M 3SG.M-increase with=opinion=3SG.M opinion
kamā ta-zdādu n=nāru bi=s=salīṭi ḍawʾan.
like 3SG.F-increase DEF=fire(F) with=DEF=oil brightness
「アドバイスを求める人がアドバイザーより良い意見をもっていたとしても、火が油で光を増すように、彼の意見は増強される（のだ）。」（Dickins & Watson 1998: 419）

Dickins & Watson（1998: 420）は、「書き手は自らの思考の流れを、括弧でくくれそうな補足情報で一時中断しており［…］*ʾinna* は［その文に］そうした情報が含まれることを表している」（“the writer in effect interrupts his or her own train of thought to introduce some parenthetical information […] the use of [*ʾinna*] is a function of the inclusion of this information”）と述べている。この観察自体は的確だが、*ʾinna* はそれ自体がつかない側の節が《非焦点》であることを標示している、という説明はあまりに倒錯的にひびく。こうした非文頭の *fa=ʾinna* は統語法上義務的でもない（こうした副詞句・副詞節の後に必ずあらわれるわけではない）ため、本稿では文頭・非文頭を分かたず、*(fa=)ʾinna* はそれに続く文（全体ないし要素）に焦点が含まれると説明する立場をとる。

この他、*ʾinna* は接続副詞 *bal ʾinna* …「というよりも…」、*ṯumma ʾinna* …「それから…」、*ḥattā ʾinna* …「しかも…」、宣言表現（*wa=llāhi ʾinna* ...「神に懸けて…」など）や命令・禁止文の直後などの環境にも現れることが指摘されている（e.g., 内記 1989: 84; Buckley 2004: 297, 711）が、本稿ではこれらについても機能の分化は認めない。

2.4 *ʾinna* の歴史と非焦点機能

ʾinna は、セム諸語に広く見られる提示詞（presentative, PRSV）と同源だと認められており、さらにアッカド語の指示詞 *anna/annû* との比較から《指示詞／提示詞》→《焦点標識》の文法変化を経たと考えられる（Bloch 1991; Zewi 1996; Testen 1998: 48-59）。特にヘブライ語の提示詞 *hinnē* は文頭に現れ、名詞句ないし《主語・述語》語順の文（この場合、動詞は分詞である場合が多い）のホストとなるという統語構造をもつ（小脇 2013: 91-92）[11]。別の傍証として、口語アラビア語マグリブ諸方言で *ṛa-*（動詞命令形「見よ」に由来）が提示詞から焦点・モダリティ・談話標識などに機能を拡張していることも注目される（とりあえず Procházka & Dallaji 2019 が参照できる）。

アラビア語では典型的な提示詞として *hā* や *ʾiḏā* が存在するが、これらと違って *ʾinna* は名詞句のみをとることはないため、共時的には提示詞とはいいにくい[12]。ただし *ʾinna* は提示詞と共起することが可能である（Testen 1998: 48; Howell 2003, vol. 5: 396）。例えば (12) は一見 *ʾinna* に提示詞的な機能を認めたくなるような例だろう。

(12) ***hā** **ʾinna** l=masīḥa hunā* 「見よ、ここにメシアがいる」
PRSV **INNA** DEF=Messiah here （«Ἴδε ὧδε ὁ Χριστός»）
（マルコ書 13 章 21 節、New Arabic Version 訳、聖書協会共同訳）

提示詞は、日本語では上記例のように「見よ」ないし「ほら」のように主文から独立した命令文・感動詞として訳される慣習があるが、通言語的には後続の名詞句（および文）とともに 1 つの文をなし（cf. Killian 近刊）、発話態度をあらわす機能語と定義するのが妥当であろう。日本語口語なら注記喚起の機能をもつ終助詞「よ」（日本語記述文法研究会 2003: 241-244）などで訳したほうが自然な場合も多い（cf.「ここにメシアがいるよ」、「メシアはここだよ」、「（ほらみて、）メシアよ」）。

Killian（近刊）は通言語的に提示詞が否定・疑問を含む非現実の文タイプにあらわれにくいことを指摘している。*ʾinna* は否定文や疑問文では現れにくいが（2.1 節）、提示詞と（多くの場合広いスコープをとる）焦点化標識の機能的・歴史的連続性を示す現象と考えられそうである。疑問文（「のか」）・否定文（「のではない」）での「のだ」が狭い焦点を表しやすい（「スコープの「のだ」」; 野田 1997）ことや、中国語「（…是）…的」文（杉村 1982）も非現実と共起しにくいことは注目に値する。やや別の視点から、一般に焦点構文が非現実法と共起しにくく、否定文では広い焦点がとりにくいという現象は、ソマリ語・宮古語（林 2018）や東アフリカの複数のアラビア語変種やナイル＝サハラ諸語（筆者の調査）で確認されている。この事実は稿を改めて論じたい。

ほかに、本稿では詳述しないが、*ʾinna* は補文／名詞節化標識としての非焦点的機能がある。この用法は動詞 *qāla*「言う」の目的語（「…と [言う]」）に限られる。その他の環境で現れる補文標識 *ʾanna* は *ʾinna* と同じ形態統語構造をもつ[13]。ただし、*qāla* の直後に現れる直接話法の補文でも *ʾinna* が現れる頻度は低くない。この事実に基づき、Ouhalla（1997）は *qāla* がデフォルトで焦点化された補文のホストとなる、と解釈している。この説明にはやや無理があるにしても、この相補分布は *qāla* に *ʾinna* の標示を受けた発話が続きやすいという言語事実と関連付けるべき問題であろう。さらに *ʾiḏ ʾinna/ʾanna ...*「…なので／すると…」や *min ḥayṯu ʾinna/ʾanna ...*「…なので」などいくつかの理由節標識が補文標識の *ʾinna/ʾanna* とともに現れるが（内記 1989: 84）、これらに焦点化の機能が認められるかは現時点では不明である。

また、*ʾinna* に《関係代名詞 *mā*（英語の what に相当）＋文／述語》が続く文構造から再分析（*ʾinna* + [*mā* + 文] → [*ʾinna* + *mā*] + 文）されたと考えられる副詞 *ʾinnamā*「（単に）…にすぎない／そうではなく…」は、*ʾinna* がかつて名詞句のホストともなりえたことの化石的な証拠のようである。*ʾinna* と同様に、逆接や訂正（3.1.1 節参照）を表す機能 (13) があることは特筆に値する。

(13) ***ʾinnamā*** *huwa* *dīnārun.*「それは（ディルハム貨ではなく）ディナール貨だ」
just 3SG.M *dinar* （Fischer 2002: 170）

この他、逆接の接続詞としては、この *ʾinnamā* や先述の《非文頭の *fa=ʾinna*》のほか、*lākinna*「しかし」が頻用される。この語も *ʾinna/ʾanna* と同じ形態統語構造をもち、語源的なつながりが疑われる[14]。また、古典期以前のアラビア語では「強調形」（energetic）と呼ばれる、語尾 *-(a)n, -(a)nna* をもつ動詞形もよく用いられた。音形のみならず、*la=* と共起しやすいなどの形式的類似、何らかの「強調」を表すという機能的類似がみられることから、これらも *ʾinna* と同源である可能性は排除しきれない。

3. *ʾinna* の意味と分布

3.1 *ʾinna* の意味

伝統的なアラブ文法学では *ʾinna* の意味は *tawkīd*（*taʾkīd*）であると説明される。この概念は英語や日本語で ‘emphasis’ や「強調」と訳されてきたが、具体的にどんな意味を表すのだろうか。Dickins & Watson（1998: 419-428）は 2.3 節の《非文頭の *fa=ʾinna*》以外の *ʾinna* を「強調」（‘emphatic’）用法と呼び、それをさらに「力み」（‘stress’）、および「場面展開」（‘contrast’）、「場面設定」（‘scene-setting’）、「総括」（‘linkage’）の３つのテクスト機能に分けている。テクスト機能については 3.2 節で改めて述べるが、「力み」については、聴衆を説諭するような檄文（‘exhortatory texts’）などに典型的な、「テクストを幾分感情的なものにする」（‘introduce an emotional element into the text’, p. 423）「鼓舞」（‘call to arms’）の機能をもつと説明している。しかし、(14) のような例は、単文で発話として完結しテクスト機能を認められないが、価値観を既に共有している者同士での、むしろ脱感情的な用法であり、「力み」のラベルにそぐわない[15]。

(14) ***ʾinnā*** *li=llāhi* *wa=**ʾinnā*** *ʾilay=hi* *rājiʿ-ūna.*
INNA.1PL for=God and=**INNA**.1PL to=3SG.M return.PTCP-PL.M
「我々はアッラーのものであり、アッラーのもとに帰ってゆく（のだ）。」
（「ご愁傷さまです」にあたるイスラーム的定型句）

恐らく *tawkīd* を「強調」とするのは誤訳であり、結論先取的には、「断定」ないし「確証」（‘assertion, confirmation’）のように訳されるべきものである。以下本節では、文脈が明らかな具体例（主に de Saint-Exupéry, *Le petit prince* や新約聖書など、第三の言語から日本語・アラビア語に翻訳されたテクスト）を用い、*ʾinna* の《断定のモダリティ》の意味を検討しつつ「のだ」との機能的な異同を明らかにする。これら個々の文脈は、外国語教育の枠組みでは「用法」とも呼びうる。

3.1.1 背後の実情の提示（「説明」）

日本語「のだ」の主用法として、伝統的に「説明」（野田 1997; 日本語記述文法研究会 2003）、よりデリケートには「背後の実情の提示」（田野村 1990）と呼ばれるものがある。具体的には、先行文脈と関係づけて新情報として事情を提示・披瀝する用法（理由説明、訂正、換言など）である。冒頭に挙げた「のだ」と対応が指摘される諸構文は、ふつう主にこの用法の同定に拠っている。(2)・(9)・(11) や以下はこの用法の例である。(14) も、新情報の提示というより共有情報の再活性化というラベルが適している（「…ものだ」とも訳しうる）が、この用法に位置付けられる。

(15) ＜ぼくについてこないほうがいい、という理由として＞
ʾu-xbiru=ka – ***ʾinna**=hu* *bi=sababi* *l=ḥayyati* *ʾayḍan.*
1SG-inform=2SG.M **INNA**=3SG with=cause DEF=snake too
「そういっているのはね……蛇のせいでもある<u>んだ</u>」
（*Le petit prince* 15 章、Yūsuf 訳、内藤訳）

(16) ＜飛行機を初めて見ての「この「（しな）もの」は何か」との質問に答えて＞

a. *hāḏā lays-a šayʾan. ʾ**inna**=hu ya-ṭīru.*
this NEG.is-3SG.M thing **INNA**=3SG.M 3SG.M-fly
*ʾ**inna**=hā ṭāʾiratun. wa=hiya ṭāʾirat=ī.*
INNA=3SG.F airplane(.F) and=3SG.F airplane=1SG

b. *hāḏā lays-a šayʾan. ʾ**inna**=hu ya-ṭīru. ʾ**inna**=hā ṭāʾiratun. ṭāʾirat=ī.*（グロス省略）

c. しなものじゃないよ。これ，飛ぶんだ。飛行機なんだ。ぼくの飛行機なんだ。

d. ものじゃないよ。飛ぶんだよ。飛行機。ぼくの飛行機だ。
（*Le petit prince* 3 章、上から Yūsuf 訳、ʿAmmārī 訳、内藤訳、管訳）

(17) *lā ya-dʿ-ūna ʾabadan ʾilā ʾiḍrābin,*
NEG 3PL.M-call-3PL.M never to strike
*bal ʾ**inna** ʾiḍrāba=hum ya-timmu bi=muḍāʿafati l=ʾintāji.*
but **INNA** strike=3PL.M 3SG.M-complete with=increase DEF=production
「彼らは決してストライキを呼びかけてはいないが、彼らのストライキは増産によって実施されている（のだ）。」（Buckley 2004: 711）

3.1.2 把握

「のだ」は対人提示的でない用法（把握、発見、想起）をもつ。*ʾinna* も (3b)・(18) のように他者に直接的に表明されない気づきを表す文を標示できる。提示詞由来である *ʾinna* がこの用法をもつのはやや意外だが、「説明」用法からの派生と解釈できる。

(18) ＜砂漠で遭難し水がないにも関わらずキツネの友人の話を始める王子について＞
*wa=qul-tu fī nafs=ī: "ʾ**inna**=hu lā yu-qaddiru l=xaṭara* [...]"
and=said-1SG at self=1SG **INNA**=3SG.M NEG 3SG.M-assess DEF=danger
「このぼっちゃん，どんなにあぶないことになってるか，わかっていないんだ。[…] と，ぼくは考えました。」（*Le petit prince* 24 章、ʿAmmārī 訳、内藤訳）

3.1.3 実情の吐露

「のだ」は、新たな前提を突如導入するかのように見える、実情を吐露する発話（「実は…のだ」）に現れることも指摘されている。(19) のように、*ʾinna* もこの文脈に現れうる。(1) のように、実情の吐露を促す問いが先行文脈に現れている場合もある[16]。

(19) a. *ʾanā ʾayḍan, sa=ʾa-ʿūdu ʾilā mawʾil=ī lyawma* [...]
1SG too FUT=1SG-return to habitat=1SG today
*ʾ**inna**=hu ʾabʿadu bi=kaṯīrin... ʾ**inna**=hu ʾaṣʿabu bi=kaṯīrin...*
INNA=3SG.M farther by=much **INNA**=3SG.M more.difficult by=much
「ぼくも，きょう，うちに帰るよ [...] でも，きみんとこより，もっともっと遠いところなんだ……もっともっとほねがおれるんだ……」
（*Le petit prince* 26 章、上から Yūsuf 訳、内藤訳）

b. *hal ta-ʿlamu... **ʾinna**=nī ʾa-ʿrifu wasīlatan tu-mkinu=ka*
Q 2SG.M-know **INNA**=1SG 1SG=know method(F) 3SG.F=enable=2SG.M
mina li=stirāḥati matā ši ʾ-ta...
(some.)of DEF=rest when wished-2SG.M
「あのさ……好きなときに休憩できる方法を知ってるんだけど……」
（*Le petit prince* 13 章、ʿAmmārī 訳、管訳）

3.1.4 眼前提示・実演

千田＆金（2019）は「のだ」と朝鮮語 *kesita* に共通する用法として、《眼前提示》ないし《実演》、つまり歴史的現在時制との共起を指摘しているが、*ʾinna* にもこの用法が認められそうである。*ʾinna* に提示詞が伴う場合、少なくとも古典語では述語動詞が非過去形式をとることがある。アラビア語では基本的に主節の主動詞には時制標示が義務的であり、(20a) の述語には過去のコピュラ *kāna* を伴った *kāna qāʾiman* が期待される。歴史的現在ではないが、非現在（未来）の事態を現在形（無標の「未完了形」）で示している現代語の例として、予言 (20b) もある種の《眼前提示》と言える可能性がある。

(20) a. *xaraj-tu fa=ʾiḏā ʾinna zaydan **qāʾimun***
went.out-1SG then=**PRSV** **INNA** Zayd **stand.PTCP**
「（私が）外へ出たところが、ザイドが立ってるんだよ」
（Testen 1998: 48, ‘I went out and behold! Zayd (was) standing’、古典語の例）
b. ***hā** **ʾinna** l=ʿaḏrāʾa **ta-ḥbalu** wa=**ta-lidu** bnan*
PRSV **INNA** DEF=virgin **3SG.F-bear** and=**3SG.F-give.birth** son
「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む」
（マタイ書 1 章 23 節、上から New Arabic Version 訳、聖書協会共同訳）

中世のアラブ文法学では、*ʾinna* 文の述語に動詞未来形が許容できるか否かについて異論があったが、*ʾinna* 文と共起する明らかに未来を表す現在形の用例 (21) は逸脱とはみなされていなかった（Testen 1998: 6-7）。提示詞を伴ってはいないが、これも (20b) と並行例といえそうである。

(21) *wa=**ʾinna** rabba=ka la=ya-ḥkumu bayna=kum yawma l=qiyāmati.*
and=**INNA** Lord=2SG.M LA=3SG.M-judge between=2PL.M day DEF=resurrection
「さだめの日に主はお前たちをお裁きになる（のだ）」（Testen 1998: 6）

3.1.5 当為

「のだ」と *ʾinna* で差がある用法もある。「のだ」には当為（断定的な命令、一般的な道理など）を表す用法があることが知られるが、今のところ *ʾinna* についてはこの用法は確認できていない。例えば以下のように複数の日本語訳では「のだ」が現れているが、アラビア語では命令形ないし現在形が用いられている。

(22) ＜どうすれば自分を「なつかせる」ことができるか、という問いへの返答＞

a. ***ʾijlis*** *ʿalā l=ʿušbi ʾawwalan hākaḏā ʿalā mabʿadatin minn=ī qalīlan.*
sit.IMP on DEF=grass first like.this on distance from=1SG little

b. ***ta-jlisu,*** *ʾawwalan, baʿīdan qalīlan ʿann=ī – hākaḏā – ʿalā l=ʿušbi.*
2SG.M-sit first far little from=1SG like.this on DEF=grass

c. 最初は、おれからすこしはなれて，こんなふうに，草の中にすわるんだ。

（*Le petit prince* 21 章、上から ʿAmmārī 訳、Yūsuf 訳、内藤訳）

3.1.6 即時的判断・直接指示

一方、「のだ」は既定の内容でない場合、例えば発話者による即時的・一方的な判断や宣言、直接的に対象を指示する文脈には現れにくいことが知られる（田野村 1990）が、*ʾinna* はこうした文脈で頻出する。以下では一貫して複数のアラビア語訳で *ʾinna* が用いられ、複数の日本語訳で「のだ」が用いられていない。(12) もこの例だが、日本語訳としては伝達態度を表す終助詞「よ」が対応しているように見える。

(23) ＜羊の絵を要望されて、ともかく描いてやった絵について＞

a. *hāḏā lays-a xarūfan, ʾ**inna**=hu kabšun. ʾ**inna**=hu ʾaqranu.*
this NEG.is-3SG.M sheep **INNA**=3SG.M ram **INNA**=3SG.M having.horn

b. *lays-a hāḏā xarūfan. ʾ**inna**=hu kabšun. la=hu qarn-āni.*
NEG.is-3SG.M this sheep **INNA**=3SG.M ram for=3SG.M horn-DU

c. そうだな……これ，あたりまえのヒツジじゃなくって，ツノが生えてるもの…

d. よく見てくれよ……これって羊じゃないよね、山羊[17]じゃん。角があるし……

（*Le petit prince* 2 章、上から ʿAmmārī 訳、Yūsuf 訳、内藤訳、管訳）

(24) ＜夜空にうかぶ「自分の惑星」を実際に相手に見えるように指示しながら＞

a. *ʾunḏur ʾilā najmat=ī, ʾ**inna**=hā tūjadu fawqa=nā mubāšaratan.*
look.IMP to star=1SG **INNA**=3SG.F 3SG.F.exist above=1PL directly

b. *ʾunḏur-ī ʾilā kawkab=ī. ʾ**inna**=hu fawqa=nā tamāman.*
look.IMP-SG.F to planet=1SG **INNA**=3SG.M above=1PL completely

c. ぼくの星をごらん。ちょうど，真上に光ってるよ……。

d. おれの星を見てごらん、おれたちのちょうど真上に来ているよ……。

（*Le petit prince* 17 章、上から ʿAmmārī 訳、Yūsuf 訳、内藤訳、管訳）

(25) ＜別れを悲しむ私になぐさめるため咄嗟に「笑い声」をプレゼントする前に＞

a. *ṯumma ʾ**inna**=nī ʾa-waddu ʾan ʾu-qaddima la=ka hadiyyatan...*
then **INNA**=1SG 1SG-hope COMP 1SG-present to=2SG.M present

b. *ṯumma ʾ**inna**=nī ʾu-qaddimu la=ka hadiyyatan...*（グロス省略）

c. それから，ぼく，きみにおくりものを一つあげる……

d. それにおれがおまえに贈り物をあげるから……

（*Le petit prince* 26 章、上から ʿAmmārī 訳、Yūsuf 訳、内藤訳、管訳）

3.2 *ʾinna* の分布

ʾinna に関する先行研究では、意味というより分布傾向（テクスト中の出現位置、レジスターと出現頻度など）に着目した記述も目立つ。*ʾinna* の分布傾向は、前節までにみた *ʾinna* の構造や意味とどう関わっているだろうか。

まず、3.1 節で述べた通り、Dickins & Watson（1998: 425-428）は「場面設定」・「場面対比」・「総括」の 3 つのテクスト機能を提案している。実際には、*ʾinna* で標示され、かつ前方照応・旧情報を含まない章・段落初頭の文は現時点で一例もみつかっていないため、*ʾinna* が「場面設定」機能をもつといえるかは疑わしいが、対比や総括は 3.1.1 節でみた「説明」用法と連続している。「のだ」もテクストの様々な位置に現れうることが知られるが、角田（2004: 71）はこうした現象を統合的に捉え、「ノダは、人間が認識し、疑問をもち、推測し、判断する、あるいは結論づけるという基本的な思考のプロセスを言語として表す場合に用いる」と分析している。本稿では検討する余裕がないが、Dickins & Watson の指摘について、角田の観点からの分析も可能かもしれない。

一方、「のだ」と *ʾinna* のテクスト上の分布には明らかな違いもある。Fakhri（1995）による、*ʾinna* は段落初頭に現れやすいという観察（2.2 節）は、「のだ」が段落末に現れやすいと言われること（田野村 1990; 今村 1996）と好対照をなしている。この違いは、断定的な命題を先に述べたがるか後で述べたがるかの、文化差としての分析も不可能ではないが、統語構造の違い（標示が現れるのが右周縁部か左周縁部か）の影響も疑われる。例えば、(26) のように重文（等位接続）や関連性の強い 2 文が連接される場合、*ʾinna* は前方の節・文、「のだ」は後方の節・文に現れる対応が頻繁にみられる。

(26) a. *fa=ʾ**inna**=nā ra ʾay-nā najma=hu fī l=mašriqi*
then=INNA=1PL saw-1PL star=3SG.M in DEF=east
wa=ʾatay-nā li=na-sjuda la=hu.
and=came-1PL PURP=1PL-worship to=3SG.M
「私たちは東方でその方の星をみたので、拝みに来たのです。」
（マタイ書 2 章 2 節、上から New Van Dyck 版、聖書協会共同訳）

b. *ʾ**inna**=nī ʾākulu wa=ʾa-nāmu jayyidan hunā*
INNA=1SG 1SG.eat and=1SG-sleep well here
wa=ʾa-skunu maʿa ʾaṣdiqāʾa l=ī fī nafsi l=ḥujrati.
and=1SG-live with friends for=1SG in same DEF=room
「私はここで，よく食べ，よく眠っているよ。私は友人たちと同じ部屋に住んでいるのだ。」（ラアビー「監獄の手紙」、奴田原 1995: 116-117 の訳）

c. *ʾ**inna**=hu bāʾiʿu ʾaqrāṣin muhdiʾatin li=l=ʿaṭaši, yu-blaʿu*
INNA=3SG.M seller tablets(SG.F) calming for=DEF=thirsty 3SG.M-is.swallowed
qurṣun min=hā fī l=ʾusbūʿi, fa=ta-ġn[ā] ʿani š=šurbi.
tablet from=3SG.F in DEF=week then=2SG.M-are.free from DEF=drinking
「それはのどの渇きをしずめるように調剤された丸薬を売る商人だった。一週間にひとつそれを呑めば、もう水を飲む必要など感じなくなるのだ。」
（*Le petit prince* 23 章、ʿAmmārī 訳、管訳）

また、「のだ」には「圧迫感」があり、特に論述文などでは「さじ加減」（今村 1996）が求められるといわれる[18]。これに対して、*ʾinna* は特に演説や檄文などではかなり頻出することが知られている（Holes 1993）[19]。例えば奴田原（1995）所収の「ナーセル憲章」（演説文）では、総段落数 50 のうち初頭に *ʾinna* が現れているものは 30 段落である（なお同日本語訳では段落末での「のだ」の出現は 50 段落中 9 段落）。応用的には、こうしたテクストについて、*ʾinna* を全て「のだ」と訳すことは勧められない。

むしろ *ʾinna* の使用は「エレガント」（Cowan 1958: 193）または「フォーマル」（Dickins & Watson 1998: 428）にひびくといわれる。逆に日本語口語諸方言では「のだ」（あるいはその同源／同義語）が頻繁に使用されるのに対し、アラビア語口語諸方言は基本的に *ʾinna* と同源の同義語をもたない（Dickins & Watson 1998: 428）点で異なっている。

4. おわりに

本稿では、*ʾinna* と「のだ」には特定の節タイプとの共起可能性（2.1 節など）、当為用法の存在や即時的発話での許容（3.1 節など）、テクスト内での分布位置やレジスター的分布・文体的印象（3.2 節）などの違いが指摘できるが、むしろ「のだ」との対応を積極的に認めてよさそうなあらわれ（1 節、3.1 節など）が多いことを指摘した。

冒頭で述べた通り、日本語によるアラビア語教材では *ʾinna* は「訳す必要がない」などと説明されてきたが、これはアラビア語教育の「輸入元」である英独仏語（「のだ」に対応する構文はあるが使用頻度は低い、cf. 福嶌 1994; 大竹 2009）でのアラビア語研究・教育の経験則に基づく指針に倣ったものではなかっただろうか。

現在、アラビア語教育の現場では、読解を中心とする旧来のモデルから、発信志向型へのパラダイムシフトが進行中であり、文法教育も発展が期待される。日本語とアラビア語の対照言語学的研究は、現時点では極めて研究蓄積の少ない分野だが、直接的に応用を視野に入れつつ科学的記述研究を進める方法論として有意義である（cf. アブドーラ＆イブラヒム 2019）。本稿はそうした対照研究の方向性を示すことを目的としたが、ヒューリスティックな事例収集により「のだ」と *ʾinna* の対照可能性について仮説形成をしたに過ぎない。本稿では十分扱わなかったが、同源語 *ʾinnamā* や *lākinna*（vs. *lākin*）の機能の記述（2.4 節）も、*ʾinna* の包括的な分析にとって有益だろう。

また、本稿ではアラビア語 *ʾinna* について中国語・朝鮮語・スペイン語と日本語の対照研究の知見や、提示詞に関する類型論的研究との接続を不十分ながら試みた。冒頭に挙げたように、「のだ」やそれに対応する諸構文には形式・機能にある程度の共通性・連続性があり、対照に留まらず類型論的枠組みでの今後の議論の深化が俟たれる。

出典

コーラン（日本語訳）

1957　『コーラン（上）』（井筒俊彦訳）、岩波書店、東京。

1970　『コーラン』（藤本勝次・伴康哉・池田修訳）、中央公論社、東京。

新約聖書マタイ書・マルコ書（日本語訳・アラビア語訳）

1997　*Kitāb al-Ḥayā* (New Arabic Version), Zondervan, Grand Rapids (Michigan).

2007 *al-ʾInjīl al-Muqaddas (al-ʿAhd al-Jadīd) wa-l-Mazāmīr* (New Van Dick Version), The Bible Society of Egypt, Cairo.

2018 『聖書』（聖書協会共同訳）、日本聖書協会、東京。

de Saint-Exupéry, Antoine

1948 *Le petit prince*, Reynal & Hitchcock, New York.

1953=2000 『星の王子さま（オリジナル版）』（内藤濯訳）、岩波書店、東京。

2011 『星の王子さま』（管啓次郎訳）、Kadokawa、東京。

2013 *al-ʾAmīr al-Ṣaġīr* (translated by Muḥammad al-Tihāmī al-ʿAmmārī), al-Markaz al-Ṯaqāfī al-ʿArabī, Casa Blanca.

2016 *al-ʾAmīr al-Ṣaġīr* (translated by Saʿdī Yūsuf), Al-Kamel Verlag, Freiberg.

参考文献

（日本語文献）

アルモーメン・アブドーラ、ワリード・イブラヒム

2019 『日本語・アラビア語翻訳研究の諸相―翻訳教育と異文化コミュニケーション』えんぴつプレス、大阪。

今村　和宏

1996 「論述文における「のだ」文のさじ加減：上級日本語学習者に文の調子を伝える試み」『言語文化』33、51-78。

大竹　芳夫

2009 『「の（だ）」に対応する英語の構文』くろしお出版、東京。

小沢　重夫

1978 『モンゴル語の話』大学書林、東京。

小山　彰

2013 「コプト語サイド方言における焦点化転換の文焦点化機能―マルコ福音書の用例分析から」『オリエント』56(2)、37-52。

小脇　光男

2013 『聖書ヘブライ語文法（改訂版）』青山社、茨木。

榮谷　温子

2014 『はじめましてアラビア語』第三書館、東京。

佐藤　道雄

2003 「アラビア語における余剰の代名詞を含む *ʾinna-hu*, *ʾanna-hu* に後続する節の統語論的な特徴」『ニダバ』32、105-114。

2008 「現代文語アラビア語における動詞 *tamma* の用法（後編）」『ニダバ』37、106-114。

塩田　勝彦

2010 『ハウサ語基本文法』大阪大学出版会、吹田。

杉村　博文

1982 「「是…的」―中国語の「のだ」の文」寺村秀夫（編）『講座日本語学 12―外国語との対照 III』明治書院、東京、155-171。

田野村　忠温

1990　『現代日本語の文法 I―「のだ」の意味と用法』和泉書院、大阪。
千田　俊太郎、金　善美
2018　「朝鮮語の *kesita* 文―實演提示機能を中心に」『ありあけ』17、1-26。
角田　三枝
2004　『日本語の節・文の連接とモダリティ』くろしお出版、東京。
内記　良一
1989　『くわしいアラビア語』大学書林、東京。
日本語記述文法研究会（編）
2003　『現代日本語文法 4―第 8 部モダリティ』くろしお出版、東京。
奴田原　睦明（編）
1995　『対訳現代アラブ文学選』大学書林、東京。
沼田　善子
2009　『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房、東京。
野田　春美
1997　『の（だ）の機能』くろしお出版、東京。
林　由華
2018　「ソマリ語と宮古語の焦点構文についての対照研究」2018 年度第 1 回エチオピア諸語研究会（2018 年 11 月 10 日、大阪大学）発表資料。
福嶌　教隆
1994　「*es que* と「のだ」」『日本語と外国語との対照 I－スペイン語と日本語（１）』（国立国語研究所報告 108）、国立国語研究所、東京 57-81。
本田　孝一、石黒　忠昭（編）
1997　『パスポート初級アラビア語辞典』白水社、東京。

（外国語文献）
Arts, Tressy (ed.)
2014　*Oxford Arabic dictionary*, Oxford University Press, Oxford.
Bloch, Ariel
1991　*Studies in Arabic: Syntax and semantics* (2nd ed.), Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
Brustad, Kristen, Abbas Al-Tonsi, and Mahmoud Al-Batal
2006　*Al-Kitaab fii Ta^{c}allum al-^{c}Arabiyya with DVD: A textbook for Arabic*, Part Two (2nd ed), Georgetown University Press, Washington, D.C.
Buckley, Ron
2004　*Modern Literary Arabic: A reference grammar*, Librairie du Liban, Beirut.
陈　中耀
1988　《阿拉伯语语法》上海外语教育出版社，上海.
Cowan, David
1953　*An introduction to Modern Literary Arabic*, Cambridge University Press, Cambridge.
Dahlgren, Sven-Olof
1998　*Word order in Arabic*, Acta Universitatis Gothoburgensis, Göteborg.

Dickins, James and Janet Watson

1998 *Standard Arabic: An advanced course student's book.* Cambridge University Press, Cambridge.

Fakhri, Ahmed

1995 "Topic continuity in Arabic narrative discourse", Mushira Eid (ed.) *Perspectives on Arabic Linguistics VII*, John Benjamins, Amsterdam, 141-156.

Fischer, Wolfdietrich

2002 *A grammar of Classical Arabic*, Yale University Press, New Haven.

Holes, Clive

1993 "The uses of variation: A study of the political speeches of Gamal Abd al-Nasir", Mushira Eid and Clive Holes (eds.) *Perspectives on Arabic Linguistics V*, John Benjamins, Amsterdam, 13-45.

Howell, Mortimer Sloper

2003 *A grammar of the Classical Arabic language*, Gyan Publishing House, New Delhi.

Killian, Don

近刊 "Towards a typology of predicative demonstratives", *Linguistic Typology*.

Kato, Atsuhiko

2020 "Burmese", Tsunoda Tasaku (ed.) *Mermaid construction: A compound-predicate construction with biclausal appearance*, De Gruyter, Berlin, 557-604.

König, Christa

2008 *Case in Africa*, Oxford University Press, Oxford.

Moutaouakil, Ahmed

1984 "Le focus en arabe: vers une analyse fonctionelle", *Lingua* 64, 115-176.

Ouhalla, Jamal

1997 "Remarks on focus in Standard Arabic", Mushira Eid and Robert R. Ratcliffe (eds.) *Perspectives on Arabic Linguistics X*, John Benjamins, Amsterdam, 9-45.

Procházka, Stephan and Ines Dallaji

2019 "A functional analysis of the particle *ṛā-* in the Arabic dialect of Tunis", *Zeitschrift für Arabische Linguistik* 70, 44-72.

Reckendorf, Hermann

1921 *Arabische Syntax*, Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, Heidelberg.

Testen, David D.

1998 *Parallels in Semitic linguistics: The development of la and related Semitic particles*, Brill, Leiden.

Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich and Andrzej Zaborski (eds.)

2006-2009 *Encyclopedia of Arabic language and linguistics*, Brill, Leiden.

Wright, William

1967 *A grammar of the Arabic language*, Cambridge University Press, London.

Zewi, Tamar

1996 "The particles הִנֵּה and וְהִנֵּה in Biblical Hebrew", *Hebrew Studies* 37, 21-37.

[1] 本稿では特に断らない限り正則アラビア語（特に現代標準アラビア語）を「アラビア語」と呼ぶ。音韻表記は Versteegh et al.（2006-2009）を基にし、先行研究からの引用も全てこの方式に則って改変している。断りがない限り太字・下線・日本語訳は全て筆者による。グロスには以下の記号を用いる（1, 2, 3: 人称、ACC：対格、COMP：補文標識、DEF：定、DU：双数、F：女性、IMP：命令法、M：男性、NEG：否定、NOM：主格、PERF：完了、PL：複数、PRSV：提示詞、PTCP：分詞、PURP：目的節、Q：諾否疑問、REL：関係節標識、SG：単数、TOP：主題、VOC：呼格）。ただし必要のない限り性・数・格・不定の標示は省略し、動詞テンス・アスペクトは概ね対応する英語活用形にて表現する。本稿では「のだ」・「んだ」・「のである」などのレジスター変異を区別せず、「のだ」によって代表させる。林由華氏からは本稿について多数の助言をいただきました。ここに記して謝意を表します。

[2] 日本語訳コーランでは直訳調の訳文が一般的である。例えば *ʾ**inna** llāha lā yastaḥī ʾan yaḍriba maṯalan mā baʿūḍatan fa=mā fawqa=hā*（コーラン第 2 章 26 節）は「まことにアッラーは蚊でも何でも平気で譬え話にお引きになる。」（井筒訳 1957）、「まことに神は、蚊でもそれ以上のものでも、譬えに引用することを恥じたまわない。」（藤本・伴・池田訳 1970）のように訳されている（太字・下線は筆者による）。

[3] つまり格標示の機能は一部の文タイプで中和している。ウガンダのナイル・サハラ系言語であるイク語（Ik）ではこれとかなり並行的な現象がみられるが、このように動詞の前では格標示が中和ないし欠如する（‘no case before the verb’）という現象はアフリカの諸言語（特にアフロアジア語族とナイル・サハラ語族）に広く見られる（König 2008）。

[4] (2b) の例で *ʾinna* に 3SG.F 代名詞 *=hā* が現れているのは、*risālat-*「手紙(F)」と一致させたものだと解釈できるが、形式的にはこの文の主語は *ʾan* で導入されている名詞節であり、*=hu* が現れることが期待される。なお、主語倒置が生じてはいないがこうした代名詞が現れる構文も、少なくとも古典期以前には見られた（Wright 1967, vol. 2: 81）。

[5] 全称否定構文（否定辞 ***lā*** に不定標示を欠く対格主語＋述語が後続する）が *ʾinna* 文とやや並行的な構造をもつが、「のではない」とは全く意味が異なる。e.g., ***lā*** *ʾaḥada ya-ʿrifu*（gloss: no one 3SG.M-know）「誰も知らない」（Buckley 2004: 698, 701）。朝鮮語 *kesita* 文も、未来時制述語を含む場合は（コピュラ部を）否定しにくいが、アラビア語とやや並行的に付加疑問文の用法は可能だとされる（千田＆金 2018）。

[6] ただしその因果関係は様々に説明される。例えば、榮谷（2014: 134）は「名詞文を導く接続詞で、その名詞文の主語は対格になります。名詞文になるので、主語を強調したり、取り立てたりする意味合いが出てきます。」と述べている。Brustad et al.（2006: 119）はさらに因果を逆転させて説明している（‘When it occurs at the beginning of a sentence, [*ʾinna*] points to and highlights the following noun as the topic of the sentence. For this reason, [*ʾinna*] always introduces a [*jumlatun ʾismiyyatun*]’）。この他、あくまで主題化文に *ʾinna* の付加は随意（単にレジスター的特徴）であるかのような記述も散見される（Cowan 1958: 193）。

[7] 単純化すれば「主題であれば限定名詞句である。*ʾinna* に後続する名詞句は限定である。したがって *ʾinna* は主題を表す。」というような推論になっており、(5b’)・(6)・(7) はこの推論の対偶（「主題でないなら *ʾinna* がつかない」）に対する反例になる。

[8] 実際に両概念を混同している例として、アブドーラ＆イブラヒム（2019: 56-59）は、談話主題を導入する日本語文をアラビア語に翻訳する場合について、日本語副助詞「は」（ふつう統語的な主題を表すが、この文脈ではたまたま談話主題を表している）と *ʾinna* が対応する、あるいは対応させて訳出すべきであると主張している。しかし、当然ながらこの主張のとおりに全ての日本語の「は」が *ʾinna* と訳せるわけではない。

[9] ただし、*ʾinna* が取り立て詞であるとする説明は必ずしも棄却されるべきではない。取り立て詞が、形式的にホストとなっている名詞句自体ではなく、文や述語をスコープとするという現象は日本語でもよく知られる（e.g.,「{雨}は降らない」＝「{雨が降り}はしない」、「{道草}ばかり食っている」＝「{道草を食って}ばかりいる」; 沼田 2009「後方移動焦点」）。

つまり *ʾinna* を《（文をスコープとする）取り立て詞》と呼ぶことに矛盾があるわけではない。安易に *ʾinna* 文を《「名詞文」化》標識とすることは危険だが、日本語の「のだ」文についても、名詞文との共通性・連続性についても指摘されており（e.g., 田野村 1990; 野田 1997）、その機能の連続性を探っていく価値はあるだろう。

[10] このほか、条件節の主語が条件節標識より前の位置に移動するタイプの主題化も、少なくともコーランでは事例がみられる（Fischer 2002: 227）。

[11] 小脇（2013: 92）がヘブライ語文 *hinn-āṯ hārā*（gloss: PRSV-2SG.F pregnant）を「今あなたは身ごもっているのですよ。」（下線のみ筆者が改変）と訳していることは注目に値する。その他、*ʾinna* と *hinnē* の並行的特徴として、Zewi（1996）は *hinnē* が動詞 *ʾāmar*「言う」と共起し直接話法導入の機能をもつと考えている。なお、コーランの章句などでは、*ʾinna* 文の述語が（ヘブライ語と同様に）分詞である例がかなり一般的である。

[12] Bloch（1991）は中世のアラブ文法学で「A もあれば B もある（A と B は別々のものである）」を表す *ʾinna* A, *ʾinna* B 構文などが例示されていることや、現代の遊牧民方言で *ʾinna* の同源語が存在詞としての機能をもつこと、*hā* や *ʾiḏā* などの提示詞が（ヘブライ語 *hinnē* と同様に）SV 語順の文のホストともなることなどを傍証として、*ʾinna* が本来は提示詞であったことを手堅く論じている。なお、古典期以前には単独（*ʾinnah* とも表記される）である種の感動詞「そのとおりだ」としての用法があったことも広く指摘される（Reckendorf 1921: 127; Bloch 1991: 106-112; Testen 1998: 55）。

[13]（後代の）アラブ文法学では両者は半ば異形態として、「初頭母音が i である場合、a である場合、どちらでもよい場合」のように記述されている（cf. Howell 2003, vol. 5: 392-416）。*ʾanna* は前置詞を伴う *ka*=*ʾanna*「…のように」、*li*=*ʾanna*「…ので」など副詞節標識にもなる。

[14] 伝統文法で「*ʾinna* の姉妹」（*ʾaxawātu ʾinna*）と呼ばれる。対格主語を要求しない逆接の接続詞 *lākin*「しかし」と *ʾinna* が融合した形である可能性も指摘される（Testen 1998: 33）。古典期以前には、（*lākin* と並行的に）対格主語を要求しない *ʾin* という *ʾinna* の異形態が見られたことも広く知られる（Reckendorf 1921: 129; Fischer 2002: 180）。

[15] Dickins & Watson（1998: 424）は必ずしも感情的なものだけでなく、「重要だとみなされる、つまり強調に値する言明はなんでも」（‘any statement which is regarded as important – i.e. worth stressing’, p. 424）*ʾinna* で標示され、「力み」の機能の例と説明できる、としているが、これはトートロジーに過ぎない。

[16] 朝鮮語 *kesita* にはこの用法がないことが指摘されている（千田＆金 2018: 10）。

[17] フランス語原文では *bélier*「雄羊」である。

[18] スペイン語 *es que* についても、福嶌（1994: 78）が「使用者が自己規制をして乱用を戒めているよう」であり、児童の不必要な使用を教師が「厳しく訂正する」と報告している。

[19] Brustad et al.（2006: 119）は *ʾinna* は「語り」（narrative）のテクストよりも、特定の主題について述べることが多い「説明文」（expository texts）によく現れると述べているが、これは観察に基づく事実というより、《*ʾinna* は主題を表す》という信念からの演繹であろう。